

小さな心の記録シリーズ

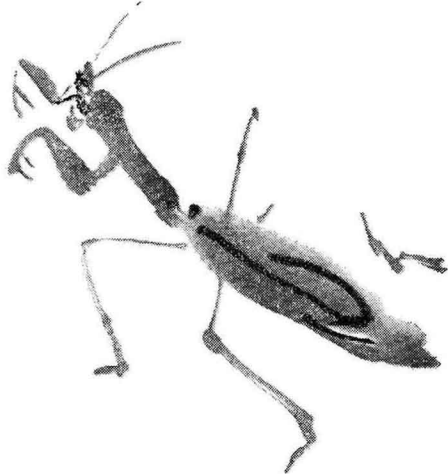
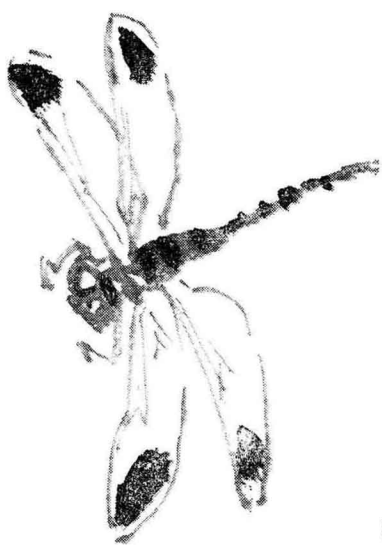
もぐりかたずんぱく

編 十 嶋 棕

画 須 那 良



のがきり



小さな心の記録シリーズ
いたずら わんぱくものがたり

昭和 47 年 12 月 10 日 初版発行

昭和 47 年 12 月 25 日 再版発行

編者・椋 鳩十 ©

装丁・画・那須良輔 ©

発行所・株式会社 童心社

東京都新宿区三栄町22

電話・(357)4181(代)

振替・東京75504

整版・有限会社 道野整版所

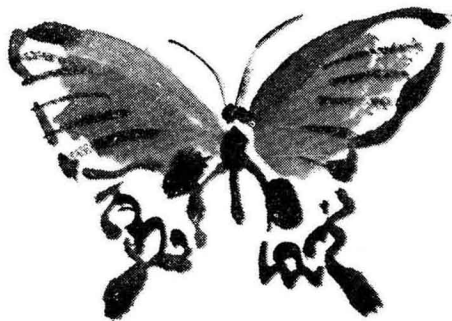
本文印刷・有限会社 春田印刷所

整版・印刷・幸英社印刷有限会社

製本・株式会社 難波製本

236 P 21.5cm×17.5cm NDC913

8793-140503-5253



いたずら
あんはく
ものがたり

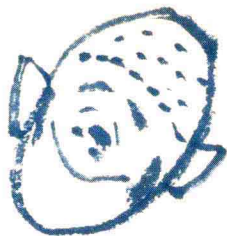
掠 鳩十編
那須良輔 画





「カッパぶちより」





まねかき

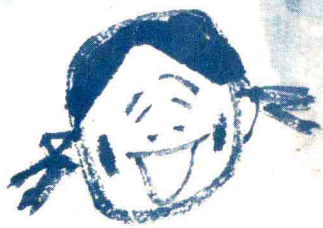
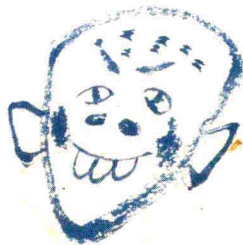
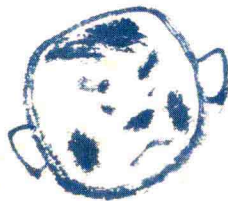
棕 鳴 十

屋根にのぼって、お月さまを見たり、雲をながめたりする作文で、優れた作品が「屋根にのぼるなんてことは危険だ。まねをするものが出ては……」ということで、選からはずされたという話をききました。

スイトリ紙で、エネルギーを、すいとられたように、静かに、お行儀よく、つくりあげられた子どもが、ほんとに、よい子なのではないか。

時には、少年の日を、エネルギーを、花火のように、パンパン爆発させる子ども——たとえ、けたを、はずすことがあっても——そういう子どもは、将来に向かつて伸びる可能性があるような気がします。

思い切って、わんぱくや、いたずらのできる子どもは、また、ある事件にぶつかって、自分で判断したり、反省もしたり、しみじみと考えたり、深く感じたりする人間として、成長していくものではなからうかと考えて、こういう、物語集を編集してみたのです。



もくじ

まぼろしのにいきこい

しろた
代田 昇 10

じしやくがほしい

いまにしゆうこう
今西 祐行 22

ねことかたな

せき
関 英雄 48

きんとん きんとん

くりきんとん

やまぐちゆうこ
山口 勇子 31

しろやま
城山のてつぺんで

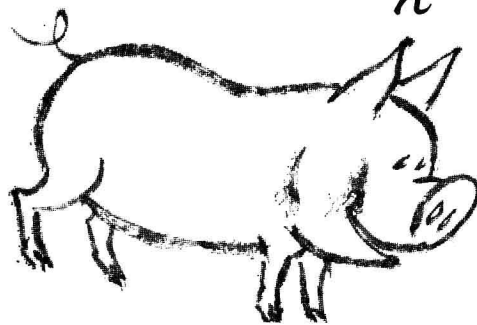
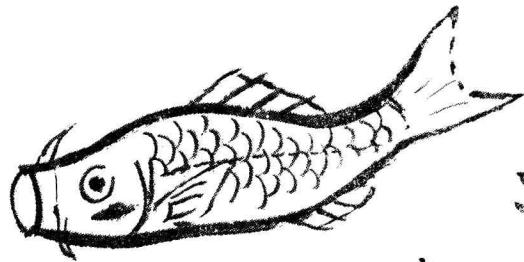
あかざのりじき
赤座 憲久 41

なかがわ
中川くんのハンカチ

すなだ
砂田 弘 58

やま
山からきたせんたくばさみ

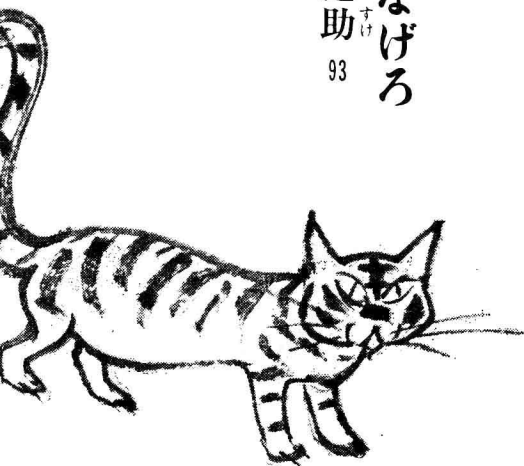
ささき
佐々木 悦 67





しろ
白べんとう
しょうげんじはるこ
生源寺美子

103



カツ
棕
鳩十
ぱぶち
はとじゅう

144

ちち
父の
いれ
ば
みやがわ
宮川ひろ

84

ながさきげんのすけ
長崎源之助
93

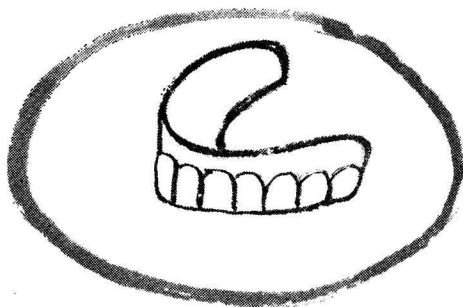


ゆうれいがでたあー
たかしよいち
76

ちやんばらごつこのけが
かつおきんや
135

ねこたいじさくせん
よこたに
横谷
てる
輝
126

おお
大だこぼうずを
たいじしたはなし
まえかわやすお
前川康男
110



おじぞうさま

ごめんなさい

杉みき子 155

先生だつて 人間だぞ！

猪野省三 190

かみなりじいさんの家

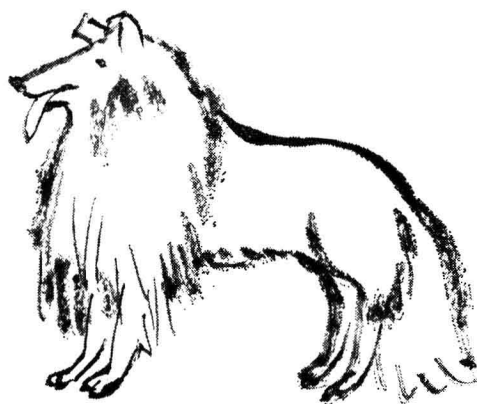
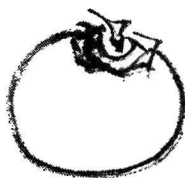
大川悦生 200

おとしあな

岸武雄 164

おやつどろぼう

増村王子 212

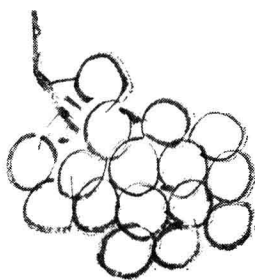
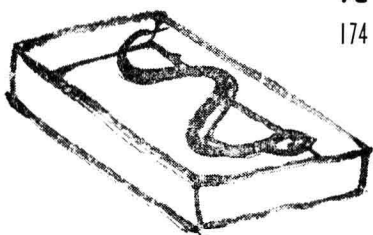


赤ナスと おまわりさん

宮口しづえ 174

がまぐち ツウツウ

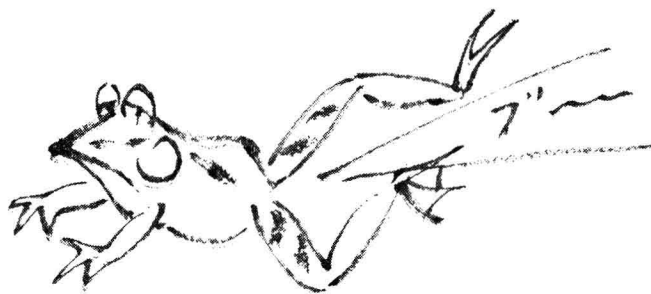
須藤克三 183



ブツとなる閣

へひり大臣

古田足日 221





いたずらわんはく
ものがたり



まぼろしの にしきごい

しろた
代田

のぼる
昇



川かわざかなの中で、子どもたちがいちばんすかれるのは、なんといってもこいたちです。

こいは、あゆのようにきりょうよしではありません。けれども、ふっくらとしていて、ぴちぴちと、はねたり、とんだりするそれは、元げん氣きのよいさかなです。

まるで、あばれんぼうの、ほくらいなかの子どもたちといっしょです。

春はるになると、農家のうかの人たちは、

「大おおきくなつて、またきなよ。」

といって、冬ふゆじゅう池いけでかっていたこいとか、たまごからかえったばかりのこいの子たちを、田たうえのおわったみどりいっぱいのひろびろした田なかの中に、はなすのです。ところが、元げん氣きのよいこいたちは、それでもまんぞくしません。

「ああ！ おらあ、もつとひろいところにいきてえなあ。」

といって、ぴーんと空そら高くはねあがって、田たのあぜをとびこえたり、どしゃぶりの大雨おおあめの日ひなどには、＼ぴちやぴちや＼と雨水あまみずをつたわって、あぜをよこぎったりして、小川おがわのこいになるのです。

もつとも、中なかには、

「おらあ、小川おがわなんかに、いきたかねえ。」

と、おもっていたのに、水すいがいで、むりやり池いけからおしながされたうちべんけいのこいも、いたでしようがね。

さて、このころから、村むらのわんぱくぼうずたちと、こいとのかたがたの「たたかい」が、いたるところの小川おがわの中なかではじまるのです。

ぼくら一年二組ねんくみのきょうしつでも、大きなこいをとったじまんばなしで、毎日毎まいにち日ひがもちきりでした。

「きのう寺沢川てらさわがわで、おらあ、こんなどでけえこいをとったよ。」

なんて、だれかがじまんでもしたら、それこそたいへんです。

「なにに、ほんとか。」

「寺沢川てらさわがわのどのへんよ。」

「へへえ！ そいつあ！ うそぞらよう。」

クラスおとしの男この子たちは、がやがやと、うかれたようにさわぎだします。そして、いつせいに、その子このつくえのまわりを、とりかこんでしまうのです。

ある日ひのことです。

「きりつ」「れい」「さようなら」

がおわって、みんなが、つくえをかたづけはじめたときです。

「おおい、みんな、ちょっとまってよ。」

と、がき大^{だい}しょうのしのぶちゃんがいいました。ぼくは、——ちえっ！ またか——と、おもいました。でも、かけだすわけにはいきません。

あとからのしかえしが、こわかったからです。

しのぶちゃんのはなしというのは、やつぱり、きのうじぶんがとったという、大^{おお}きなこいのじまんばなしでした。それがまた、口^{くち}をとんがらして、手^てまねをいれた大^{だい}とくいのものでした。けれども、きいているぼくには、それがすこしもおもしろくないのです。いや、なんだかくやしくて、はらがたつてくるのです。（つまんねえよう。やめろってば）と、心^{こころ}の中で耳^{みみ}をふさいで、いらいらしていました。

そのときです。ぼくのとなりにいた、ふみちゃんが、

「のんちゃん。」

と、そつとささやいたのです。

「あんなもの、なにさ。けさ、畑^{はた}田^{だい}井^い用^{よう}水^{すい}で見た^みのよ。こんな大^{おお}きなにしきごいがいたんだに。」

ふみちゃんは、りよう手^てをひろげて、こいの大^{おお}きさまでおしえてくれました。

ふみちゃんは、ぼくのうちのきんじよの子です。小さいときから、ままごとあそびでは、いつでも、ぼくのおよめさんでした。

ふみちゃんのいうことには、うそなんてぜったいありません。ぼくは、おもわずふみちゃんのほうに、にじりよっていききました。ふみちゃんは、

「く、る、み、の木きんとこ。しっとるずら。」

と、さっきよりもっと小さい声こえで、ゆっくりといました。

もう、しのぶちゃんのしかえしなんか、どうだってよくなりました。ぼくは、カバンをよこだきにすると、むがむちゅうの「ぜんりよくしつそう」でかけだしたのです。

用水ようすいは、くるみの木きの下したで、どんよりとふちになっています。

ぼくは、そっと用水ようすいのどてにのぼり、のどかなふちをのぞきこんで、きよろきよろあっちこちとさがしはじめました。

（いるかなあ。いてくれますように。）

心こころの中なかでいのりながら、石いしの下したとか草くさむらの中なかなど、じっとあなのあくほど見みめました。それこそ、ちよっとの水みずのうごきにも気きをくばっていました。

小さいどじょうが、ちよろろつと、どろ水みずの糸いとをつくつてにげました。水ぎわの石いしのよこをけしゴムほどのさわがにが、のんびり、よっこらよっこらあるいていま



した。

けれども、ふみちゃんからきいたあのすばらしいにしきごいは、見^みあたりません。

またもういちど、すみからすみまでさがしました。それでもないので、ふちの中^{なか}に小石^{こいし}をおとしてみました。やっぱりい
ません。

でも、あきらめることなんかできません。

(きつと、川上^{かわかみ}にのぼっていったにちがいない。)

ぼくは、そうおもうことにしたのです。

用水^{ようすい}を、どんどんさかのぼりはじめました。

とちゅう、ふちになつているところを見^みつけては、むねを、
どきつどきつとさせていました。

(いないかなあ。いるにちがいない。)

などと、心^{こころ}にいいきかせては、ふみちゃんのこいをむちゅう
でおいつづけました。

ふしぎなことに、いつのまにか、ぼくの頭^{あたま}の中^{なか}をすばらしい